

こんなことありましたよと、スナップ写真のようなおたよりもよくいただきます。ちょっとした話、前号の続きです。

●勤めているスーパーで、朝、商品を並べていると、うしろで「おはようございまーす」。明るい声は、マットを抱えたダスキンのお兄さんでした。気持ちのいい挨拶で始まった日は仕事も軽やかな感じでした。

群馬・岡村祥枝さん
●わが家の隣りはハーティさん。「正子さん、ござんきれいなまんま、もったいなか。まーだ、ばさらか汚さんね」。モップを返しに行つて教えられ、いまでは玄関先から家中のサッシ、内から外から、交換の前にはたましいほど働いてもらっています。

佐賀・篠原正子さん
●娘を育てるのに自信喪失していた頃、いつも励ましてくれた小林さん。ダスキンをとおして三十年のおつきあいになります。帰ってきた娘の二歳の長女を抱き上げ、「わあ、かわいい。ちょうどこんなだったよねえ。孫のような気がするよ」。なんだか目がうるんでしまいました。

新潟・橋本恵美さん
とくに意識することなく、相手のことを思う素直な気持ちを言葉にできたら…、伝わるのですね。

株式会社ダスキン会長

伊東英幸

写真・市谷 健「今日はね、とっておきの一日なの」

no.491

喜びのタネまき新聞

読む人の幸せを心に願って作る

ふるさととの暮らし② 「月夜に思う」

東京とふるさとを往復しながら制作活動が続ける

中野洋一さんの絵とエッセイの第2回目。

都会の暮らしでは忘れられている

月夜の豊かさ、山の方が伝わってきます。



月明かり

家と家とが おしくらまんじゅう
軒と軒とが コツツンコ

みんな出て来い
今夜は月夜

おとさん達はジャコ捕りに行った
だーれもない
遊ぼうよ

月夜がこんなに明るいとは…。

長い都会生活ですっかり電飾の夜に慣らされて、月夜の素晴らしさを忘れていた。こんな夜、小さい頃は、影踏みをしたかなあ。記憶がはつきりとしなが、十五夜の綱引きの夜、堅いサトウキビの皮を歯で裂いて、中の甘い汁をしゃぶったのを思い出した。

漆黒からグリーンに！

自然の景色のいいところは、テレビと違い、時間が細切れでなく、いつまでもあきることなく見られ

るところだ。説明なし、コマースャルなしで無料というのがいい。

夜中にトイレに起きて、妙に外が明るいので、よく見ると月夜だったりする。

夜がしらじらと明けてくると、今度は朝日の出番である。周りをオレンジ色に染め、前向き太陽が刻々と昇ってくる。

今まで黒ずんでいた山の樹木は、カッと目を見開いて、混じり気のない絵の具そのものの色、エメラルドグリーンに変身する。山一面の圧倒的な緑に、朝から昼へと移行していくのである。

絵と文 版画家 中野洋一

版画家。陶彫家。鹿兒島県生まれ。故郷の風物等をテーマに木版画や陶彫を制作。1995年には朝日新聞日曜版のカットを連載。オランダ国際版画ビエンナーレ展入選など国際的にも活躍。

おうちでチャレンジ!「ぷるぷる・きなこもち」

きな粉と黒蜜さえあれば、あとは家にある材料でOK。食感ほららびもちに似ていますが、わらび粉の代わりに片栗粉を使うので手軽で簡単、家計にもマル。作るときは、混ぜ方に気をつければ、ぷるぷるの食感が楽しめます。きな粉とカラメル品のいい甘さで幸せを感じてください。



お料理研究家 こいけりえ

おやつ時間 簡単、美味しい楽ラクレシピ



◎作り方(4人分) ●カラメルを作る

鍋にグラニュー糖60gを入れてそのまま中火にかけ、周りが溶けてきたら、鍋をゆすりながらグラニュー糖を溶かしま

す。全体の3分の2くらいが液体になったら木べらで混ぜます。表面があめ色の泡状になったら火から下ろし、熱湯60mlを3〜4回に分けて入れ、混ぜ合わせてカラメルにします。この時少しづつ入れないと熱湯がはねるので、くれぐれも一度に入れないように気をつけること。

●生地を作る

鍋に片栗粉50g、砂糖30g、水1・5カップを入れて木べらでムラなくしっかりと混ぜ合わせる。そこにカラメルを少しずつ



加えてさらに混ぜ合わせる。中火にかけて絶えず木べらで混ぜながら、全体が透き通るまで火を通し、弱火にして1分くらい練り上げたら火を止めます。このとき、木べらは止めずに絶えず混ぜていないと、片栗粉が固まってしまい、つぶつぶになるので充分に気をつけること。よく混ぜたら、あら熱をとるため氷水に生地を固まりごと入れて冷やします。熱がとれてから、目の細かいザルにとって水気をきります。

前もってきな粉適量をふるったバットに、生地を広げて入れ、上からまたきな粉をふる。ラ

ップをして冷蔵庫で1〜2時間冷やす。わらびもちのように、ぷるぷるの食感がお好みなら、冷蔵庫で冷やす前の出来立てをお召し上がり下さい。冷やしたものは少し固めになるため、くずもちのような食感になります。但し、冷蔵庫に入れないと固くなるので気をつけて。

固まつのままザルに
どいて水気をきる



きな粉でサンドして
冷やすのカゴ

◎盛り付け

出来立ては包丁で、冷えたきなこもちは少し固くなるのでキッチンバサミを使うと便利。

一口大の食べやすい大きさに切って、器に盛り付ければ完成。お好みで黒蜜をかけても美味しく召し上がれます。



みてもらおう!!

見てうれし、見せてうれし、この写真。わたしの出番の1枚を送ってください。



「子どもの日だよ!」
愛知県幸田町 荒木かおり



「ピンクのおうどん。
おはし使えるのよ!」
三重県菟野町 大橋かずえ



「おにいちゃ〜ん!」「うふ、うふ、うふ」
広島県大竹市 片山節子

家族や友だちにしか撮れないステキな笑顔、みんなに見てもらいたいわたし好みの1枚。もちろんかわいいペットも撮れたら送ってください。お待ちしております!
(詳細は7ページ)

ふ

るさとの能登から着想を得た三星静子さんの作品は古い布を使った絵。96歳というのも話題だが、その母をデビューさせたのは娘。刺繍作家の草乃くさのしずかさんだ。母娘の共同作品は華やかで力強く、多くの人を惹きつけている。

こぎれ

1000枚の古裂

コラーージュの絵で

96歳の作家が二度目の個展



布をめぐる 手仕事

「布絵なのよ。わたしのは」

三星さんの言った言葉が、すっと胸に入った。

古裂コラーージュとは、古い布を紙に糊付けし、切り貼りした作品。コラーージュは糊付けを意味する仏語で、ピカソなども試みたアートの手法。日本では骨董品や藍染めの高価な布で作る作家もいるが、三星さんの場合は

使い古した布のリサイクルだ。

洋服や和服、カーテンなど布は全てとって置き、模様を生かしながら、華やかで力強い作品にする。とは言っても、色彩とイメージの豊かさを大切に作る作家だから、鮮やかな色を求めて、布そのままではなく染めたりもするそう。他の人と違うこの豊かな生命感はどうしてなのだろう？ その秘密は「布絵」という言葉の中に隠されていた。

三星さんは子ども4人を育てた。戦中戦後の何もない時代である。能登の冬は寒い。毛布を黒く染めてマントを作り、残り布は帽子にした。「お母さん、靴も作ってたわよね。底はどうしたの？」「スリッパの底や靴の底だったかしら」いまや日本刺繍の第一人者という娘の草乃さんが、このおおらかさの中で育ったのである。

「私たち子どもの服は全部手作りでした。周りから、お洋服ステキねと言われてたけど」母が少しでも可愛いように、みんなと違うようにと作ってくれて「特別」なんて思っただけだったの

季節ごとに布を染め直し、アップリケをした子ども服。着られなくなると、最後に自分の服に変化をつけるためにリフォームして楽しんだ。三星さんの愛情と才能は布をめぐる開花した。娘は自然にその才を引き継いだに違いない。



「母は図鑑や本など、資料を見るのが好きなんです」



ピーマン



金魚



サヨリ



元氣さが みんなの励みに

カラージユを始めたのは50代。家の中に飾る絵が欲しかったので自分で作ったそう。今も布絵にする材料が絨毯の下に敷き詰めてある。その後ご主人を亡くし、17年前に次男も…。悲しみと孤独は、作品に没頭することで愛情と激しい表現に昇華していった。「余暇から作品へと突破したんですね」会場を手伝いに来ていた三男の方が言った。「次は100歳で、三星静子展をやると言ってるんですけど、家族は心配です」

三星さんは遅めに起き、夕方から時には翌日の未明まで創作する。ある日、草乃さんが見て、「あら、お母さん、すごいじゃないの!」と感嘆した。自身も、当時源氏物語を主題に大作に取り組んで壁に突き当たっていた。



能登への思い

夜の日本海を背にとどろく太鼓の音

牛



だからこそ、母の自由奔放な表現に気付いたのだ。下絵を描かず布にいきなりハサミをいれる大胆さが躍動感を生んでもいる。

「一緒にひとつの作品を作ってみましょうよ」

こうして05年に91歳の新人カラージユ作家が誕生。今春の第二回三星静子展は終了したが、草乃しずか展で「能登への思い」などの共同作品を展示。今後各地をまわる予定(日時未定)。

手作りの時間、母娘は幼い頃のさびしくて懐かしい能登の思い出を語り合いながら針を動かしたという。作品は分かち合った喜びで、観る人を励ます。「おしゃべり手仕事」と名付けた布絵は長い人生の歳月から生まれている。



ほ



ほ



え



み



の



ひ



ろ



ば



先生

兵庫県伊丹市 勝山直人

親子二人で、こじんまりとした浜田理容に通い40年。理容師の彼はこんな話をしてくれた。昭和12年生まれ、2才で母を亡くし、父と兄の3人暮らしの大阪で戦災にあい、家は焼失。小学3年生のPTA会費を未納した時、1日目「忘れました」2日目「すみません。忘れまし」3日目は無言でうつむいた。「昼に職員室へ来なさい」担任の村上先生に叱られることを覚悟して行くと、先生はバリカンを持って、慣れない手つきで頭を丁寧にかけて下さった。「今でも忘れられない」と私の髪を切る彼の手が止まり、目に涙が浮かんでいた。

70才の記念同窓会ではご健在の先生と再会。「中学校を卒業し、3年間の修行後に、理容師になりました。今でも先生の愛情を心を持って、50年あまりバリカンを握り続けています」深いしわのある、母のような温かい手を何度も握りしめた。私もジーンとしてしまいました。

——すーこ通いたいお店はね。



プチ同窓会

熊本県天草市 宮崎美知子

大学では寮生活を送り、華やかより厳しい青春時代を共に過ごした友人6人と10年ぶりに集まり、民宿に1泊のプチ同窓会を開きました。

それぞれ結婚もし、各地方に散らばった友人が子供を連れて参加。総勢30人の団体客となり、それはもう大騒ぎ。子供そっちのけで盛り上がっている私たちのそばで、民宿のおかみさんは子供たちを孫の様に可愛がって下さいました。

美味しいお料理とサービス満点の心遣いに、久しぶりにゆったり、のんびり。夜遅くまで昔話やダンナ様、子供のことなど語り合いました。

子育てと仕事に追われる毎日で、こんな日が来るのもっと先と思っていました。民宿のおかみさん、またお訪ねしてもいいですか。

——もあ、解放されちゃって〜



カタツムリ

青森市 蝦名友子

我が家には現在高校3年生になる娘がいます。娘は、小学校4年生から「チューバ」という金管楽器の中でも、一番大きな楽器を好きになり、中学でも吹奏楽部でチューバ。将来の夢は、「ブロのチューバ奏者になりたい！」

とにかくまっしぐら。5年前からは、レッスンを受けるために、20キロの重さのマイチューバを背おい、夜行バスで10時間、東京へ一人で出かけて行きます。小さな体に、大きなチューバを背おって出かける姿はまるでカタツムリ。

「我が家のカタツムリさん、夢をつかもうね」
——まっしぐらだと、夢はかなうもの。



ご縁？

山口県下松市 野田千珠代

新大阪駅から乗った下りの新幹線車内は連休のためかとても混んでいた。私は娘の産後の手伝いの帰り。疲れ果てていたが、空席は見当たらない。ふと見ると白人女性が大きな旅行鞆を通路に置き上に座っている。残り半分に空き！

腰掛けたくとうずうずしてきた私。英会話出来るし…と自らを鼓舞。勇気を出して彼女に「腰掛けさせていただけますか」と聞いてみた。

大きなリュックを背に、お疲れ顔のおばさんを気の毒に思ったのか、彼女は笑顔で「どうぞ」と言ってくれた。袖振り合うも他生の縁。いや、一つの鞆に腰触れ合うのもご縁かも。「お国は？」と聞けばスイスからで、「母語はフレンチよ」。

そうか仏語か。でも、ままよ。かつて英会話教室で学んだことを総動員しながら、いろいろ話を続けていたら、「あなたは何処で英語を勉強したの」と聞かれた。日本のおばさんが英語で喋るのが不思議だったらしい。広島駅で降りていく彼女に心から「ありがとう。日本での休日を楽しんでね」と別れの挨拶をした。

——64歳で英検3級！ チャレンジ精神よ！

チャンスをつかむのは自分
良きにつけ、悪しきにつけ、
あなたにスポットのあてられる時がある。
絶対に忘れてならないことは、スポットを
あてられた中身が大事だということです。
中身が自分勝手なものであれば、
自分の思うようにはならぬことです。
ホンモノの人間になりましょう。
いくつになっても、前進あるのみです。
チャンスがあれば、自分からつかむものです。

鈴木清一



リングガール

島根県出雲市 加地美代子

「おばあちゃん、リングガールをやってくれない？」と結婚式を控えた孫娘が、80歳過ぎの私にこう言ってきた。「彼もおじいさん、おばあさんをととても大事にする人だから是非！」とのことなので、引き受けることにした。

当日は留袖で正装し、母親手作りの熊のぬいぐるみの胸元に置かれた結婚指輪を持って入場。「かわいいー」と思わぬ掛け声がかかり、赤面しつつも、しずしずと神父様の許へ届け、大役も無事に終了しホッとしました。

後日、孫から電話があり、「皆、小学生の女の子が出てくると思ったら、おばあちゃん、感動したって大好評だった。ありがとう」優しい孫の言葉に私も感激ひとしおでした。

——末永くお幸せに……。



「イチゴって、おいしすぎるねー」
神奈川県二宮町 川口正彦

あなたのお便りや写真をお寄せください

●投稿には、名前、年齢、職業、住所、電話番号、現在ご利用のダスキンの店名をお忘れなく。紙面やホームページで紹介させていただいた原稿や写真にはお礼をさせていただきます。

●送り先

〒163-0223
東京都新宿区西新宿2丁目6番1号
新宿住友ビル23階(私書箱47号)

ダスキン「喜びのタネまき新聞」編集室
電話 03(5909)6703
e-mail: koho4@mail.duskin.co.jp

無料

おそうじ相談
実施中!

ダスキンコールセンター
平日の9:00～17:00
0120-100-100

●2ページの中野洋一さんのアトリエ

〒896-1301 鹿児島県薩摩川内市鹿島町蘭牟田2131-203
電話: 09969-4-2763

●4-5ページの連絡先

アトリエ草乃しずか
〒168-0065 東京都杉並区浜山3-15-17
電話: 03-5969-8402 FAX: 03-5969-8403
ホームページ
<http://homepage3.nifty.com/yumeshishu/toppage.html>



ハンバーグ

東京都八王子市 北村泰彦

我が家では、おばあちゃんを作るハンバーグが一番人気。家族全員の大好物です。

「玉ネギは包丁で切らないとおいしくないね」おばあちゃんはいつも涙目で話します。

「便利な調理器を使えば」とアドバイスをして、根性で通しているおばあちゃん。

先日、孫で、小4の私の息子が、おばあちゃんを手伝おうと思ったのか、目にはゴーグル、鼻の穴にはチリ紙をつめ、真剣な顔で、

「今日は僕が玉ネギを切るよ」と、台所に参上。これでおばあちゃんは腰をぬかすほど大爆笑。

肝心の玉ネギは、少し大きいツブツブだった。味は最高で、おばあちゃんもみんなも大満足。一つ自信をつけた孫の玉ネギ坊主でした。

——やるじゃん。

エコらんじ最終回

～小さな紙もリサイクル～

日頃よく届くダイレクトメールの葉書や封筒、要らない領収書やメモ紙、レシートなど。私の住む地域では、燃えるゴミに分類しがちな、そのような小さな紙をナイロン製のゴミ袋でなく、紙ヒモで縛ったり、紙袋で回収リサイクルしています。私は、家に余っている紙袋を壁に吊り下げて、身の回りにある小さい紙をこまめに貯めています。紙袋ごとリサイクルされるので、吊り下げるヒモもナイロン製の時は紙ヒモに変えてしっかり分別。貯まったら、回収日に近所のゴミステーションへ。将来のことを考えると、“どんな小さな紙でももったいない”と、せっせと袋に入れていきます。

(佐賀市 中島タカ子)



心のバリアフリーにも感動。

第27期研修生 千葉俊之さん(大学院生) アメリカ カンザス州に1年間滞在

アメリカでは、かけがえのない多くの出会いがありました。

あらゆるバリアフリーがとても進んでいたこと、

建物・社会・それらを実現する人々の「心」

みんなが当然のように私を受け容れ、

とても生き生きしていました。

このことが、人生の目標を失いかけていた

私の心に進むべき『道』を

照らし出してくれたのです。



写真(左)千葉さん、(右)恩師のDr.ホワイト。
より多くのまち・制度がバリアフリーになるための
架け橋役になりたいです!

ダスキンは、
愛の輪運動を
サポート
しています。

1981年にスタートした「広げよう愛の輪運動」は、障害者福祉を中心とした幅広い分野で社会貢献を目指す
障害のある若者達を海外へ派遣し、先進の福祉を学んでいただく支援をしています。
これまでに日本から海外へ400人以上の研修生を派遣し、アジアの研修生80人以上を日本に受け入れてきました。
卒業生たちは、全国各地で障害者の自立生活運動をはじめ、様々な分野のリーダーとして活躍しています。

●問い合わせ先 (財)広げよう愛の輪運動基金 ☎06-6821-5270 <http://www.ainowa.jp/>

お楽しみクイズ

研修生の千葉さんが
アメリカで学んだことは
何でしょう?



フリー

正解者の中から30名様に
「キッチンきれいセット」を
プレゼント!



下記の要領でご応募ください。

- ◆官製ハガキに
 - ①クイズの答え②郵便番号③住所④氏名⑤年齢⑥性別
 - ⑦電話番号⑧現在ご利用のダスキンの店名をご記入の上、
 - 下記あて先までお送りください。
- ◆締め切り 平成22年6月11日(金)当日消印有効
- ◆ダスキン関係者の応募はご遠慮ください。
- ◆当選者の発表は、プレゼントの発送をもってかえさせていただきます。
(平成22年7月上旬お届け予定)
- ◆あて先 〒163-0223
東京都新宿区西新宿2丁目6番1号
新宿住友ビル23階(私書箱47号)
(株)ダスキン「喜びのタネまき新聞」クイズプレゼント係
- ◆応募に関してのお問い合わせ TEL:03-5909-6703
- ※抽選結果に関するお問い合わせはお受けできません。予めご了承ください。

今回ご応募いただいた個人情報については、(株)ダスキンの範囲内でのみ利用させていただきます。プレゼントの抽選・発送の目的以外には使用いたしません。個人情報に関するお問い合わせや、ご自身の個人情報の開示・訂正・利用停止については、(株)ダスキン「喜びのタネまき新聞」クイズプレゼント係 TEL:03-5909-6703 までご連絡ください。

●この新聞をお届けしているのは

株式会社 ダスキン

発行：広報・広告部 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町1-33

編集：「喜びのタネまき新聞」編集室
〒163-0223

東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル23階(私書箱47号)
TEL:03-5909-6703 FAX:03-5909-6771

【お客様の個人情報のお取り扱いについて】

お客様の個人情報は商品のお届けや回収、サービスの提供に利用させていただきます。また、後日商品やサービスのご案内をさせていただきます場合があります。なお、お預かりした個人情報はダスキングループ企業と加盟店の範囲内で利用させていただきます。配送業務等で個人情報を外部企業に委託する場合は、弊社の厳正な管理の下で実施します。個人情報に関するお問い合わせや、ご自身の個人情報の開示・訂正・利用停止については、下記ダスキンコールセンターまでご連絡ください。

■ダスキンコールセンター

0120-100100 www.duskin.jp